

名探偵の挑戦状

森村誠一／内田康夫
赤川次郎／栗本薫



KADOKAWA NOVELS

牛尾刑事、浅見光彦、三毛猫ホームズ、
伊集院大介。現代の名探偵が難事件に
待望のオリジナル・アンソロジー



ガガワ バルズ

平成六年六月二十五日初版発行

著者 森村誠一 内田康夫
赤川次郎 栗本 薫

発行者 角川歴彦

めいたんてい ちようせんじよう
名探偵の挑戦状

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九五〇八

〒一〇二 電話 営業〇三三八八三二 編集〇三三八七六四五

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-785002-0 C0293 N62-2

名探偵の挑戦状

森村誠一／内田康夫
赤川次郎／栗本薫



KADOKAWA NOVELS

牛尾刑事、浅見光彦、三毛猫ホームズ、
伊集院大介。現代の名探偵が難事件に挑む、
待望のオリジナル・アンソロジー

I SBN4-04-785002-0

C0293 P720E 定価720円
(本体699円)



1910293007206

KADOKAWA NOVELS

名探偵と呼ばれる人はそうはいない。ただ事件を解決するだけではない。独特のキャラクター。明断な頭脳。あつと思わせる推理と行動で、読者を魅了するのだ。

牛尾刑事。浅見光彦。三毛猫ホームズ。伊集院大介。現代の名探偵が難事件に挑む、ミステリーファン待望のオリジナル・アンソロジー。

〈初出誌〉

魔光 野性時代 一九九四年三月号

他殺の効用 野性時代 一九九三年七月号

三毛猫ホームズの英雄伝説 野性時代 一九九四年三月号

殺怪獣事件 野性時代 一九九四年三月号

KADOKAWA NOVELS

名探偵の挑戦状

森村誠一／内田康夫

赤川次郎／栗本薫

カバー絵／北見
隆

目次

魔フラツシユライト 光―牛尾刑事

森村 誠一

9

他殺の効用―浅見光彦

内田 康夫

51

三毛猫ホームズの英雄伝説

赤川 次郎

101

殺怪獣事件―伊集院大介

栗本 薫

153

魔^{フラッシュ}
光^{ユライト}
—
牛尾刑事

森村誠一

初めての経験であった。

篤子^{あつこ}はこれまで夫以外の男を知らない。二十二歳で、夫の隆道^{たかみち}と結婚するまで処女であった。そして二十九歳の今日まで、夫以外の男と交わったことはない。

そういう機会もなければ、その気もなかった。

夫は電気工事の孫下請けをしている。経済成長期には受注も多く、追い風を受けて景気がよかったが、バブル経済崩壊の煽り^{あおり}を受けて定期受注が激減し、経営が火の車となった。

大手のおこぼれの、そのまたおこぼれを拾って露命をつないでいる零細企業は、バブルが弾^{はじ}けて吹き飛ばされた。

苦しまぎれにこれまで手がけたことのない新しい素材の機械部品の加工に手を出して、傷をますます大きくしてしまった。

金策に駆けまわり、借りられるところからはすべて借り集め、低空飛行をつづけた。だが、それもととうとうにつちもさつちもいかぬところまで追いつめられてしまった。

振り出した手形の満期が数日後に迫っている。この手形が決済できなければ、今度こそ墜落を免れない。

隆道が八方駆けまわってかき集めたが、あと五十万円ほど足りない。

この五十万円さえ工面でできれば急場はしのげる。

吹けば飛ぶような工事店であるが、親から引き継いだ店である。隆道はたった五十万円で潰したくないと涙をこぼした。

だが、借りられるところからはすべて借り集めている。質草になるようなものはすべて入れてしまった。

そんなとき、篤子が時どき通っているスイミングスクールで知り合った米田道子よねだみちこという女がささやきかけた。

年齢は三十前後、どことなく崩れたような雰囲気をもっている艶つやっぽい女性である。

篤子には銀座のクラブに勤めていると言った。

「奥さんなら、すぐ店のナンバーワンホステスになれるわよ。もしもその気があったら、いつでも言うてちょうだい。ママに話してあげるわ」

と道子は以前から誘こいいをかけていた。

「駄目よ、私なんか。口下手だし、銀座のクラブの高級なお客様のお相手などとてもできないわ」

「おほほ、なにが高級なものですか。男はみんな同じよ。高級のマスクを付けていても、ベッドへのお

誘いばかりよ」

「それでは私にはますます務まらないわ」

「大丈夫。銀座のお客がよそのお客と少しちがうところは、お金を持っていることよ。自分のお金を持つていない人でも、自由にできるお金を持っているわ。そして、それが高級の証明なのよ。」

お金を持っているということは、世の中で最強の武器を持っていることなの。銀座で働いていると、そのことがよくわかるわ」

スイミングスクールでほんの一時、共に泳ぐだけの仲であるが、道子の言葉にはなまなましい説得力があつた。

身体を張つて生きている女のしたたかさが感じ取れるのである。

身体を武器として戦っている夜の戦士が、ほんの束の間、スイミングスクールで鎧を脱いで裸になつて寛いでいるのである。

そして、裸のつき合いの篤子に心を許して語りかけてくるようであつた。

その道子が、

「奥さん、なにか困つていることでもあるんじゃないの。このところ顔色がすぐれないわよ」と声をかけた。

「あら、わかるの」

篤子は内心ぎくりとした。

「それはわかるわよ。伊達に銀座で甲羅を重ねていないわ」

道子はにんまりと笑った。

篤子は藁にもすがるような気持ちで、道子に現在の窮境を相談してみようとおもった。

金は武器だと言っているほどの道子であるから、あるいは五十万円くらい貸してやろうと言うかもしれない。

篤子は夫が不渡りを出しかけて倒産しそうになっていることを話した。

「奥さんも大変なのね」

「米田さんはお金が武器だとおっしゃったけど、いまの私たちにはお金は血だわ。輸血しないと家庭が崩壊してしまうのよ」

「そんなに深刻に悩むことはないわよ。奥さんだったら、そのくらいの輸血はすぐできるはずだわ」
道子が意味ありげに言った。

「私に輸血ができる？」

篤子には道子の意味深長な含みがわからなかった。

「奥さんがちょっと目をつむるだけで、五十万円くらい右から左にすぐできるわよ」
道子の言葉にはつとまった。

「米田さん……」

「使って減るものじゃないし、ご主人に内緒でちょっと目をつむるのよ。べつに不倫を働くわけではな

いし、ご主人のためにすることでしょう。ご主人、むしろ感謝するわよ。あなたが身体を使って窮地を救ってくれたと知ったら」

「そんなこと、私にはできないわ。主人を裏切るなんて」

「べつに裏切るわけではないでしょう。あなた、いまお金は血だと言ったばかりじゃないの。ご主人と家庭を生かすために、あなたの身体を使って輸血するのが、どうして裏切りになるのよ」

道子の言葉は水に落とした一滴の墨汁のように、篤子の心の内に容積を拡げてきた。

道子の言うように、ほんの少し目をつむればこの窮地をしのげるのであれば、道子の勧めに乗ってみようかとおもった。

たしかに道子の言う通り、不倫や裏切りではないかもしれない。夫と家庭の窮地を救うことのできる強力な武器を持っていながら、古い倫理観にしがみついてその武器を使わずにいたら、かえって夫に対する裏切りとなり、妻の怠慢となるのではあるまいか。

いまこそ、その武器を使うときである。

伝家の宝刀はめったに抜くものではない。だが、抜くべき時期を逸すれば、宝の持ち腐れとなってしまう。

篤子は道子の勧めに乗ることにした。そして、彼女が紹介してくれた客と新宿のホテルで落ち合った。たがいに身の上は詮索し合わないという約束で、篤子は初めて夫以外の男に身を委ねた。

相手は五十代前半と見える脂ぎった男であった。彼は一目で篤子が気に入ったらしい。